

大阪商業大学学術情報リポジトリ

庶民は地図を利用したか

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田, 忠, ODA, Tadashi メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/352

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



〔史料紹介〕

庶民は地図を利用したか

小 田 忠

1. 大阪の地図状況
2. 『古版大坂地図解説』をまとめる
3. 『古版大坂地図集成』
4. 地図の文幅
5. 地図の作成と目的地への到達
6. 地図の間違いと地名の略
7. 往時の町名表示
8. 地図の版元と再版

1. 大阪の地図状況

今回の史料は二次資料を使用する。いくつかの理由があつてのことだが、一つには生の史料を購入するには財政状態が悪化している現在では厳しい状態である。それでは、史料を持っている図書館・研究所・博物館・大学等で史料を利用したとしても、手続きが面倒であったり、地図の保存状態が悪く閲覧できない場合がある。

地域を限定して、大阪図を閲覧したいと思つても、地図が不揃いだったり、異版が揃つておらず、苦慮することになる。

2. 『古版大坂地図解説』¹⁾をまとめる

現存の状況から、いくつかの先行した研究があるが、今回は『古版大坂地図解説』を使用する。この本を手掛かりに糸口を見付けるつもりである。『古版大坂地図解説』には68図を詳細に校訂が施してあり、大阪図を概観するには丁度よい史料である。

この本に従って大阪図をまとめる。

くろ一>「新板攝津大坂東西南北町嶋之圖」を多少焼きなおした図がくろ二>～くろ六>である。くろ七>はくろ二>～くろ六>と大同小異で、くろ一>～くろ五>図は地形・町名が偽作図である。

1) 佐古慶三『古版大坂地図解説』、だるまや書店、大正13年

＜は一＞「辰歳 補大坂圖」＜は二＞と同板で、＜は三＞は少し附録が増加している。しかし、＜は一＞は偽作図ではなく、地形・町名共に＜ろ一＞～＜ろ七＞よりは信頼できる。

＜に一＞「新撰 補大坂大絵圖」は間違いも多く史料的价值がない。＜に一＞～＜に七＞を焼き直したものが＜ほ一＞「攝津大坂圖鑑綱目大成」である。

＜ほ一＞～＜ほ四＞を踏襲した地図が＜ほ五＞～＜ほ十一＞だが、縮比に対して原図を修正して悪訂を加え、更に事項を書き漏らしている。

＜へ＞「新板 補大坂之圖」は＜は一＞・＜は二＞と同図で、誤りが少なく、地図としては最古の部類に属し、少しは参考になる。

＜と一＞「攝州大坂画圖」と＜と二＞は同一で＜わ三＞・＜か一＞・＜か二＞が同じ図式、続く＜ち一＞「懷寶大坂圖」は＜ち二＞、＜り二＞「補大坂圖」～＜り四＞、＜ぬ一＞「改正攝津大坂圖」～＜ぬ九＞、＜る一＞「修大坂指掌圖」～＜る五＞も図式が同じで酷似している。

＜り一＞は題簽・書林・附録・凡例は＜ち二＞と相違する。＜り一＞と＜り二＞は題額・題簽・書林・附録・凡例・附言で相違する。＜り二＞と＜り三＞は題額・題簽・書林・凡例・附言・背書で相違する。＜り四＞は＜り二＞と大きく変わらない。

＜ぬ一＞は題額・題簽・書林・附言において＜り四＞と相違する。＜ぬ三＞は＜ぬ一＞・＜ぬ二＞と同一である。＜ぬ四＞は＜ぬ五＞と書林・凡例において相違する。＜ぬ六＞は書林で＜ぬ四＞と相違する。＜ぬ七＞は題簽・書林・作者・附録において＜ぬ六＞と相違する。＜ぬ八＞は題簽・書林・作者・附録・凡例で＜ぬ七＞と相違する。

＜る一＞は・題簽・作者・凡例・背書において＜ぬ一＞と異なる以外は大同小異である。＜る一＞と＜る四＞は作者に多少の移動がある。＜る四＞と＜る五＞は同一である。

＜を一＞の史料的价值は豊富であるが＜と一＞～＜と三＞の方が記事において正確である。＜を二＞は原図・原本に存在しない悪訂を施している。

＜わ一＞は＜を一＞・＜を二＞を小形化した。＜わ三＞は＜わ一＞・＜わ二＞と同じ図式だが題額・題簽・書林・作者・附録・凡例は相違している。＜わ四＞は題額・書林・作者が異同する以外は＜わ一＞と同じ図式である。＜わ六＞は＜わ一＞の系統を継ぎ、作者の書き入れを欠く以外は＜わ四＞・＜わ五＞と同一図式である。

＜か一＞は＜と一＞～＜と三＞、＜わ三＞と同じく北を上とする本式のものである。＜か二＞は＜か一＞と同一図式だが書林を異にする。

＜よ一＞は＜ぬ一＞～＜ぬ四＞・＜ぬ六＞・＜ぬ七＞の図式を踏襲している。＜よ三＞は書き入れから判断して明治元年らしく見える。

＜た一＞は＜わ六＞を縮図した、しかし、附録は異なる。＜た二＞は＜た一＞と同一図式、書林を取り替えの為附録に異同を来たしている。＜た三＞は悪訂で印刷不鮮明になっている。内容が悪いせいか書林の名を削除している。以上が『古版大坂地図解説』による大正時代の大坂図の見解である。この本では大雑把な地図の編集の為に内容を見るに不便である。

その後本人が収集した大坂図を加え、研究をなし以前不十分であった地図を改め、実寸

近いサイズ5舗が『古板大坂地図集成』²⁾として昭和45年に刊行された、その中味は新板大坂之圖・新板攝津大坂東西南北町嶋之圖・新撰 補大坂大絵圖・辰歳 補大坂圖・修正攝州大坂地圖となり、内容については以前と比較にならない程鮮明な地図に変わっていた。

3. 古版大阪地図集成

「新板大坂之図」³⁾は明暦3年の刊年をもつ、八尾・久宝寺・平野・渡辺・曾根崎・上福島・下福島を描く、これらの村を近在として描いている。重要な点は京都に行く京街道、大和に抜ける三本の街道、更に堺から和歌山に行く堺街道（紀州街道）が描かれている。また、海上ではなんば嶋・寺嶋・へのか嶋・くじょう嶋・勘助嶋・四貫嶋・百石嶋と番所がいたるところにある。

大名の蔵屋敷・大阪城は大阪図において欠く事のできない風景である。

千日の火屋は墓所として寂しい場所に立地している。娯楽の場で有名な道頓堀の芝居は東から九郎右衛門の芝居・出羽芝居・名左衛門芝居・七太夫芝居と四ヶ所描かれている。当時は有名だったのか「七ふしぎのせんだん」が堂々と地図に収まっている。

この図から読み取れるのは、京街道・大和街道・堺街道を通り和歌山方面に行く街道、他に眼を転じると、海上に浮かぶ船は渡船や漁師の姿を彷彿させる。

図に描かれた島々から新たな耕地としての新田は描かれず、大阪の町名と近在の村が生活の「場」なら「火屋」は人生の終着を示す。少ない娯楽の内に芝居があり、七ふしぎのせんだんであった。蔵屋敷が経済のシンボルなら大阪城は遺物の形骸として描かれていた。

「新板攝津大坂東西南北町嶋之図」⁴⁾

大和街道・京街道・堺街道

百石嶋・ひえ嶋・南伝法・九条嶋・四貫嶋・なんば嶋・勘助嶋・寺嶋・へのか嶋

村名は50ほど

火屋（東高津の東）、千日の火屋、火屋（梅田橋北に火屋）

七フシ木センタン、耳塚

逢坂清水、清水の西側の清水、南谷町西側に名水、千日寺北側の清水

源八渡し、わたし（2ヶ所）、野里渡し、渡し（道頓堀川西）

道頓堀川に4ヶ所の芝居、安治川橋北側に芝居（2ヶ所）、堀江川のたかきや橋の芝居（2ヶ所）

竹林時の東にひ人

大坂城・蔵屋敷・天王寺・瓦

2) 佐古慶三『古版大坂地図集成』、清文堂出版、昭和48年

3) 注2に同じ。

4) 注2に同じ。

岡山・真田山・算用場・新山

制札（札の辻）

街道については「新板大坂之図」と同じ、島についても大きく変わっていない。村名が多く近在の村・字を見やすくしている。火屋の内、最初が高津、次が千日、最後が梅田の三ヶ所を描く。また、渡しについては陸路の他河川を渡る専門の船が発達してきている。これは島に家屋が建ち、往来が多くなっていることを証する。

娯楽でも道頓堀に四ヶ所・安治川橋に二ヶ所・堀江川に二ヶ所、清水名水を四ヶ所紹介している。変わった所は寺嶋家家業瓦作りの原料である「瓦土採取場」を瓦で示す。竹林時の傍に住む「非人」をも書き込んでいる。前に比べて交通の発達が著しい、娯楽の興隆も感じられる。名所が増加しているのも新たに地図を見た人の気持ちが高ぶるのがわかる。

「新撰 補大坂大絵図」⁵⁾

村名50ほど

大和街道・京街道・堺街道・平野道・中道

岡山・加賀築山・真田曲輪・茶うすむ

制札 傾城町

瓦屋・高原・瓦焼・ひでん院

清水・逢坂の清水・高津清水

七ふしきのせんたん

飛田の墓所・千日の火屋

道頓堀の芝居（4ヶ所）

一里塚

舟渡（北長柄村）、源八渡し、舟渡し

材木場

百石嶋・ひえ嶋・よし嶋・出来嶋・城嶋・申嶋・まへたれ嶋・難波嶋・勘助嶋・九条嶋
四貫嶋（新田のあと）・南伝法・よしま・西ノ嶋・新川築山新田のあと・新築地付近の
村名は前に比較して変わらない。しかし、本庄に通じる中道・平野村に通じる平野道は道
もはっきりし、街道名もついたのは通行者が多いことを認識しなければならない。

道頓堀の南側に材木場がある、渡辺村北側に位置する辺鄙な場所は長堀川が貯木場となるに似ている。

傾城町として受容された事実、一方、高原・ひでん院等の負の事実も受け入れ。瓦屋の事業も確立されたのか地図上で大きく取り上げている。

5) 注2に同じ。

「辰年 補大坂図」⁶⁾

上おばせ・下おばせ・木津村・下難波村・渡辺村・野田町・坂本町・鳴野・中濱・上福島・下福島・野田村

火屋（上おばせ西）・千日の火屋

材木場

岡山・勝山・新山

新築地

芝居（3ヶ所） 大坂城 蔵屋敷

難波嶋・前たれ嶋・寺嶋・九条嶋・四貫嶋・えのこしま

寺宗紋・町組紋・与力同心屋敷

一目見てシンプルであることがわかる。古地図の中では古く、記事が正確だとの評価だが、観光名所案内には適さない。

神社・仏閣の名所案内は日本全国を席卷することになる。簡単に豊富な一枚摺りから各地の名所が版本になり、特に江戸時代後期から名所図会が各地で出版された。

各地名所図会

日光山志 天保8年（1837） 木曾路名所図会 文化2年（1805）

大和名所図会 寛政3年（1791） 河内名所図会 享和元年（1801）

芸州巖島図会 天保13年（1842） 甲斐名所図会 嘉永4年（1851）

江戸名所図会 天保5～7年（1834～1836）

紀伊国名所図会 文化8年（1811） 近江名所図会 文化11年（1814）

摂津名所図会 寛政8年～10年（1796～1798）

伊勢参宮名所図会 寛政9年（1797） 播州名所巡覧図会 文化元年（1804）

それと共に神社・仏閣詣でが盛んになっていく。（神社・仏閣詣でを理由に大阪・京都を見物したこともある）その為、地図には観光名所は乏しい。観光名所がふんだんに盛り込まれている名所図会が高価で庶民には購入できない。それではどのように対応したのだろうか。

口による説明あるいは紙に記入されたもの、因みに得意先・仕入先が地図に書き込まれておらず先の方法が考えられる。しかし、「大坂町鑑」が刊行されてはいるが町の案内は筋・通・川・橋を中心に説明されているから、結局、口での説明、紙の説明と同じ意味に帰する。

「修改正摂州大坂地図」⁷⁾

極めて大きな地図の為、紙幅に余裕があり、周辺の村は独立した村図になっている。従前の地図では墓所・塚・芝居・名所・名水・嶋・池・遊里・小路等は記載されていた。

この図では数も増え、更に刑場・一里塚・堤・通り筋・坂・辻等が記され、内容は豊富である。

6) 注2に同じ。

7) 注1に同じ。

4. 地図の丈幅

地図の大きさは各種あり、大地図から小地図まで発行されている。地図の様態も一枚摺り・折れ本・両面摺り・切り絵図が揃っている。この様態は板行のしやすさ・見やすさ・情報の収め方を考慮したうえで決定された節がある。

小地図の部類の代表格は<へ>「新板 補大坂之図」で縦44センチ・横33.5センチ、これに類する地図は<ち一>「懷寶大坂図」、<り一>「摂州大坂画図」、<ぬ一>「改正攝津大坂図」、<る一>「修大坂指掌図」、<か一>「改正摂州大坂之図」、縦50センチ横40センチクラスが並んでいる。だが<ぬ七>「嘉永改正分見大坂図」だけは縦68.5センチ横44センチと少し大きく、この部類から外れる。町中に出て両手で広げることも可能であるが、この地図の欠点は見にくさにある。当初から行き先の見当をつけ、地図で確認する時に必要とする（一番最小の大坂図は<か二>「改正摂州大坂之図」、縦31センチ・横44.5センチ）。

また、大きな地図は板行に煩わしさが残り、且つ地図を張り合わせる面倒さもある。そして、町中へ出て使用する場合、たとえ折れ本でも不便極まりない。この部類の代表格は<を二>「修改正摂州大坂地図」、縦185.5センチ横148センチ。他は縦120センチから160センチクラス、横90センチから120センチクラス。

以上の点から地図を持ち歩くことはあっても、利用するには不便を感じる。小地図は方角・河川・橋・神社・仏閣・大阪城等を確認するのに便利である。

(注1 参照 68図の縦・横・面積)⁸⁾

番号	縦 (センチ)	横 (センチ)	面積 (平方センチメートル)
ろ一	120	78	0.936
ろ二	95	58.5	0.556
ろ三	99	59.5	0.589
ろ四	98	59.5	0.583
ろ五	96.5	59.5	0.574
ろ六	93	60	0.558
ろ七	123	81	0.996
は一	92	84	0.773
は二	91	82.5	0.751
は三	85	75	0.713
に一	138	120	1.656
に二	139	120	1.668
に三	140	120	1.68
に四	140	122	1.708

8) 注1に同じ。

に五	141	122	1.72
に六	140	126.5	1.771
に七	140	122	1.708
ほ一	124	91.5	1.135
ほ二	124.5	93.5	1.164
ほ三	124	93	1.153
ほ四	124	92	1.141
ほ五	122.5	92.5	1.133
ほ六	121.5	91	1.106
ほ七	124	92.5	1.147
ほ八	125	93.5	1.169
ほ九	126	93.5	1.178
ほ十	124.5	92	1.145
ほ十一	124	93	1.153
へ	44	33.5	0.147
と一	104	92	0.957
と二	105	90	0.945
と三	100	92.5	0.925
ち一	54	42.5	0.23
ち二	56.8	47.2	0.268
り一	47	36.5	0.172
り二	51.5	41.5	0.214
り三	35	44.5	0.156
り四	52	40.5	0.211
ぬ一	56.5	46	0.26
ぬ二	55	45.5	0.25
ぬ三	53.5	44	0.235
ぬ四	54	42.5	0.23
ぬ五	51	38	0.194
ぬ六	53.5	42.5	0.227
ぬ七	68.5	44	0.301
ぬ八	50.5	37.5	0.189
ぬ九	51.5	36.3	0.187
る一	55	43.5	0.239
る二	55	44.5	0.245
る三	54	42.5	0.23
る四	53	42	0.223
る五	54	42.5	0.23

を一	160	146	2.336
を二	185.5	148	2.745
わ一	85.5	92	0.787
わ二	93	97.5	0.907
わ三	68	99	0.673
わ四	90	87	0.783
わ五	92	87.5	0.805
わ六	101	69.5	0.702
か一	32	44.5	0.142
か二	31	44.5	0.138
よ一	73.5	49.5	0.364
よ二	73	49	0.358
よ三	72	48.5	0.349
た一	72	48.5	0.349
た二	72	50	0.36
た三	68.5	47	0.322

この表を一望すると、面積が1.00を超えている場合は大地図の目安になる。事実くに一>「新撰 補大坂大絵図」・<ほ一>「摂津大坂図鑑綱目大成」・<を一>「修改正攝州大坂地図」が該当する。逆に小地図は0.1~0.2台がその目安になる。<へ>「新板 修大坂之図」・<ち一>「懷寶大坂図」・<り一>「攝州大坂画図」・<ぬ一>「改正摂津大坂図」・<る一>「修大坂指掌図」・<か一>「改正攝州大坂之図」が該当する。

5. 地図の作成と目的地への到達

大阪図はよく知られているように京図・江戸図より遅れて刊行されている。製作量も少ない。しかも大阪図で最初の明暦図は京都の河野道清・林吉永の手により発行され、大阪の版元ではない。

もともと、京図は慶安5年（1652）、江戸図も大阪と同様自力で刊行できず、河野道清や林吉永により出版されていた。寛文（1661）に入り江戸の出版人により初めて刊行された。

『古版大坂地図解説』を概観してはっきりしたのは、誤脱が多くて利用価値がない。縮尺も不明瞭で図によっては大阪の中心である船場あたりの町が東西に長く、南北に短くなっていたり、その逆もある。（最も紙に合わせて町と付随する川・山・港等が収められている。）

方位をとっても確定されず、絵図の発想をそのまま持ち越し、有名寺院や城郭を大きく描いたり町屋の内容を見るに不便である。『古版大坂地図解説』よりよくなった地図5舗が『古版大坂地図集成』として刊行された。

この地図を概観すると凡例・備考については大阪三郷の区別・蔵屋敷の記名・役宅合紋・町組合紋・寺宗合紋・大坂三十三所観音札所合紋等がある。

ここで重要な事は三郷の区別はその町がどの組に所属しているか判明する。また、蔵屋敷の場所は蔵屋敷に関係する出入りの人、蔵元・掛屋を勤める両替商に勤務している番頭・手代・店主、蔵屋敷に水揚げする中使と米を落札する米の関係者、それと蔵屋敷の祭礼は庶民に開放をしている（中ノ島常安町高松の蔵屋敷は金毘羅大権現を祭り、海上風波の難火災をのがれる。また、中ノ島常安町の阿波徳島の蔵屋敷は五牛明神へ土細工の牛を捧げると瘡毒が平癒する。中ノ島久保嶋町にある宇和嶋の蔵屋敷は和霊神を平日に信心すると災難がない。土佐堀白子町の雲州松江蔵屋敷は鷲大明神は小児の疱瘡を軽くする。）⁹⁾。役所役宅の記名では数少ない武士、大名と両替商との関係、蔵屋敷と役所役宅を結ぶ人、武士に対する敬意。

色彩は四彩から五彩が見やすい。大阪城画は初期の地図にでてくるがくに一>「新撰補大坂大絵圖」までである。町続龜画は町屋から在領に続く図法は見る者に図を大きく見せる効果がある。

天保山附足については河川の川浚えをなし、その土砂で出来たのが天保山である。くぬ四>「改正攝津大坂図」の天保8年から見受けられる。桜の名所でもあり、庶民から愛された意味もあって掲載されている。また、目印山として船の航行の目印にもなっている。

細部を検証すればさまざまなことが判明するが、ここは『古版大坂地図解説』の備考によつての展開である。

地図は誰の為に作成されたのか、本屋が版元になるから儲けを重視する。地図製作部数は300部から350部が初版の数量で¹⁰⁾、よく売れた地図の初版は1000部、再版されても1000部が限界である。だが岩田豊樹『古地図の知識100』¹¹⁾は江戸時代を通じて発行された地図のなかで最も大量に出版され、しかも内容がよかったものは町絵図といってよい。それだけに需要が多く、利用者の層も各方面にわたっていた。と書いているが疑念は高まるばかりである。ただ、絵図類は関東よりも大阪の方が古く、沢山の種類の絵図が刊行されている。四天王寺図・住吉神社図等、地図と絵図の区分は二律背反であるがここでは町絵図を地図の一部分と見なしている。私見ながら絵図と地図の区分は古代から中世においても明確な意識などなく、その当事者が絵図的なものと地図的なものとして混用していた。絵図といっても方位・縮尺等が織り込まれていたら地図の概念に近づくかも知れない。近世大阪の水帳絵図は縮尺・縮比・方位等が明確である¹²⁾。

大阪を例にとっても、武士は数百人、天保時代の人口は凡そ35万人¹³⁾、その内地図を必要とする職種、あるいは大店、仁風便覧に掲載されている小一万の店主が地図購買の対象者であったり、大阪と在領にある庄屋クラスが地図を必要とする。それ以外の人

9) 浜松歌国『神仏霊驗記図会』、文政7年

10) 大阪府立中之島図書館編『大阪本屋仲間記録』第8巻、清文堂出版、昭和56年

11) 岩田豊樹『古地図の知識100』、新人物往来社、昭和52年

12) 大阪商業大学商業史博物館蔵「水帳絵図」

13) 佐古慶三「近世大坂人口統計の研究」

楽しむ訳でもなく、目的地到達にあえて高価な地図を購入するとは考えにくい。

よく売れた地図でも1000部だから小一万の店主との割合は10パーセント、仕事上で使用される地図が10パーセントの普及では話にならない。この時代に新本は高価であった筈（例えば大阪図ではないが「彩色山城絵図」一枚、文化14年で銀4匁3分であった。）¹⁴⁾、誰でも手が出せる状態ではない。それでは利用したい場合はどうすればいいのか、古本で購入するか、これでも高価であれば貸本屋で借りるしかない（地理の類は97種、125部とあるから地図も揃っていたと考える）¹⁵⁾。

さすがに在領の庄屋クラスになると仕事上のこともあって大阪図・大和図・和泉図・東海道図等を持っている可能性が高い。在領ではないが河内国若江郡御厨村の庄屋の目録を見れば近隣の地図を保有している¹⁶⁾（加藤家の目録中、各地の地図があり、河内國中絵図・大和国大絵図・近江国大絵図・地球輿地全図・伊豆七島全図・摂津国名所大絵図全・万世御江戸絵図・校正山城国全図等）。加藤家も大阪図を備えていた。

岩田豊樹が云うように「しかも内容がよかったものは町絵図といってよい。それだけに需要が多く、利用者の層も各方面にわたっていた。」¹⁷⁾ 本当にこの内容だったのか。この鍵は三つあり、内容がよかったものは町絵図といってよい。と云っている根拠が不明である。大きくなった江戸（江戸の町屋は火事により拡大していく）¹⁸⁾ は切絵図として販売していた。江戸図に間違いがないといっても、大阪図では上記のように間違いが多く、使用できる地図も数少ない。従ってお世辞にも内容がよかったとは断言できない。二つ目は需要が多くとあるが、大阪図に限って云うと初版が300部から1000部位で決して「需要が多く」とは云えない。

最後の「利用者の層も各方面にわたっていた。」と云うが販売部数と購入者は多くはない。岩田が「利用者の層も各方面にわたっていた。」と、全く根拠がない言説としかいえない。岩田豊樹『古地図の知識100』から引用する。

この一枚刷りを何十枚か一たばで入手したときに、すでに入手した図と重複した図との比率を調べると、江戸期に発行された点数はおおよそ見当がつくが、前期の一万種類というのは、この点を考慮して割り出した推定点数である¹⁹⁾。

この言葉だけで十分理解していただけたと思う。

目的地への到達の手段としては地図が一番説明しやすい。地図がなければ紙なり砂・土の上で目的地への場所を描くことになる（織田武雄著「地図の歴史」に収められている所収図を紹介すると興味深い挿絵がある。若い男が老人に地図を描いている、その内容は—

14) 大阪府立中之島図書館編『大阪本屋仲間記録』第8巻、清文堂出版、昭和56年

15) 長友千代治『近世貸本屋の研究』、東京堂出版、平成5年尾張大野屋惣八の蔵書内容は名所記・名所図会・地理の類は97種、125部あり、中でも名所図会は34種、置本は26部もあり、おおかた揃っている。読者・貸本屋向きの本を揃えるのが前提であって（後略）

16) 大阪商業大学商業史研究所編『大阪商業大学商業史資料目録』第3集前編、大阪商業大学商業史研究所、平成7年

17) 注5に同じ。

18) 黒木喬『江戸の火事』、同成社、1999年

19) 注5に同じ。

蝦夷の国のかたち 此国人いまた文字またハ筆墨紙等無ク故に何事にせよ指にて砂場また炉中の灰に書して人に示すわさ一後略)²⁰⁾。しかし、大阪の土地が不案内の人に対して目標物の説明や自分の場所から目的地への過程を説明する事は困難がつきまとう。

丁稚奉公をしている奉公人に地図を渡して目的地へ行けとは云わない。それは当初手代・番頭の供として得意先や諸事の使い走りや付近を駆け回ることになる。その結果、お店を中心にした地形・有名店等を覚える。さまざまな得意先を訪問することにより目標物を覚える。神社仏閣・大阪城・四天王寺・西本願寺・東本願寺・堀江川・道頓堀川・東横堀川・西横堀川・土佐堀川・御堂筋・堺町筋・芝居小屋・諸藩の蔵屋敷等のいくつかを覚えれば簡単に目的地へ到達する事ができる。つまり、地図は不要になる。このような体験は子供時代に誰でも経験している。

地図が一等力を発揮するのは初めて行く場所を捜すのに役立つ。余程の事がない限り地図を使用することはなかった。

6. 地図の間違いと地名の略

『古版大坂地図解説』の中から間違った町名を選ぶ、古地図では間違いの少ないくとも一>の誤脱を引用する。煩を避ける為に島之内のみ列挙する²¹⁾。

次郎兵衛丁西一 南米ヤ町南一 鍛冶ヤ丁北一 油丁一丁メ南一 木挽丁北丁北一
誤記

大法寺丁（大寶寺町）書誤

紺ヤ丁 笠ヤ丁 タ、ミヤ丁 モメン丁 ヌシヤ丁 略記か南を脱す

茂左衛門丁 次郎兵衛丁 心齋丁 平右衛門丁 略記か長堀を脱す

大和丁 宗右衛門丁 御前丁 布袋丁 久左衛門丁 略記か道頓堀を脱す

さすがに間違いの内容がよい。＜誤記＞の場合は正式な町名から見れば南・長堀・道頓堀が抜けている。大寶寺町については法が明らかな間違いであり、後は町名が北か南あるいは西・東にずれている。これ位の間違いは注意をしていれば目的地に到達することが可能である。

＜と一＞より後に製作された地図で内容が一番豊富である文化三年板くを一>も引用してみる。＜と一＞と同様島之内のみ紹介する²²⁾。

南米屋町南一 白銀町南一 中津町西一 カヂヤ町二丁メ北一 又右衛門町無道頓堀
久左衛門町 誤記

飾屋町 屋町 袋町綿袋町 木挽北町木挽町北之丁 木綿町南毛綿町 書誤

20) 織田武雄『地図の歴史』、講談社、1999年

21) 注1に同じ。

22) 注2に同じ。

紺屋町 笠屋町 畳屋町 木綿町 塗師屋町 略記か南を脱す
 茂左衛門丁 次郎兵衛丁 心齋丁 平右衛門丁 略記か長堀を脱す
 大和丁 宗右衛門丁 御前丁 布袋丁 久左衛門丁 略記か道頓堀を脱す

＜と一＞と同じく、＜誤記＞の場合は誤記か略記であるかは不明だが南・長堀・道頓堀が抜けている。

書き誤りは増加していて、異なる場所で字の間違い、町名表記の間違いがあり、町名がずれている場所が四ヶ所、町名の書き間違いが一箇所ある。

間違いが多いのは地図利用者にとって障害になる。だが、往時の人々は町名表記はどのように考えていたのか。

佐賀藩大阪蔵屋敷の文書「御屋舗外廻普請等并船入橋修理御届」人参の売弘元店並びに取次所の住所の書き方は下記の通り²³⁾

大坂今橋通心齋橋西北角	岡谷勘兵衛
同心齋橋 ^カ 二丁目南東側	小部屋太郎兵衛
同農人橋東詰町	河内屋権兵衛
同谷町筋追手南へ入	製法屋三右衛門
同玉造安堂寺町山家屋町	綿屋重兵衛
同天満橋津国町	松屋弥兵衛
同中嶋添橋町	安田屋喜兵衛

人参の売弘元店並びに取次所であるから住所・名前に間違いがあってはいけない。勿論、写し間違い、写字の場合に住所を略す事も考えられる。この七件から写し間違いの可能性は少ない。ここはその通りに写した、写す時に略した。と考えるほうが妥当である。どちらであっても問題を展開していく不自由さはない。

最初の岡谷勘兵衛の住所は伝統的・典型的な住所表示であるといえる。今橋通は東西の通り、心齋橋は南北の筋、交差する地点より西北角に店舗がある。

時代にもよるが一つの町の家宅は15から30だから、この付近に行けばこの住所ですぐわかり、尼崎一丁目であることがわかる。しかし、「尼崎一丁目」の町名を捜すには困難で一定の場所を捜すのは難しい。だけれども、今橋通の線・心齋橋の線を辿れば店の探索は容易に辿り付ける。

この町名の起点は橋で、心齋橋から二丁東へ移動する。堀江川の南に位置する。南東側とあるから堀江川の南にあり、二丁東の東側は長堀次郎兵衛丁、西側は長堀心齋丁にあたる。この表記でも町の構成が明確だから問題は起こらない。

河内屋権兵衛宅の場合も農人橋を起点に考えている。東横堀川に架けられた農人橋の東詰めにある説明だが、農人橋を渡った東側に「農人橋詰町」があり、表記された農人橋東詰町は間違い。東が余分である。「農人橋詰町」と農人橋を渡った東側に農人橋詰町があると解釈して「東」を挿入してしまったと思われる節がある。

23) 大阪商業大学商業史博物館蔵篇『蔵屋敷Ⅱ』、大阪商業大学商業史博物館、平成13年

谷町筋を南北の線と置き、「追手」をどのように扱うか思案しなければならない。久宝寺橋通を東に行き、谷町筋の交差点より西に追手町がある。更に思案橋より東に行けば追手筋になる。谷町筋と追手筋の交差点より西に錦町一丁目がある。北の方角から南下して追手筋に出た。そして、南に入ると錦町一丁目に出る。次に松尾町・谷町三丁目が該当する。

東横堀川に架かった橋で安堂寺橋の西側に安堂寺町がある。玉造近辺にある山家屋町とは距離があり、説明が見つからない。安堂寺町でなく「安堂寺通」として、玉造付近あたりに山家屋町がある。「安堂寺町」を線として理解していた事も頭の片隅におかなければならない。

天満橋津国町は住所表示としては間違いで不適切だと云える。「津国町」に行くなら天満橋ではなく、天神橋を渡って北に一直線（四丁）に行けばよい。また、大坂町鑑の宝暦・天保いずれも「撰津国町」として、「つのくにちょう」と読む、地図は「津国町」と明記され読みは全く同じであるから問題はない。

最後の同中嶋添橋町の中嶋は中ノ嶋の略かノが抜けたかどちらかである。大阪の町名で添橋町は存在しない。だけど、土佐堀川に架かる橋は湊橋、その橋を渡った左側が湊橋町である。二重の間違いを犯しているが賢明な庶民は目的地に到達することになる。

7. 往時の町名表示

文政7年8月発行の奥付をもつ「商人買物独案内」は地方の商い及び品物を求める人々が来阪し、仕入れができるように編集されている。そのことを踏まえて凡例に土橋可教が次のように書いている。²⁴⁾

諸職商人の数々の中に年久き商家当時手広く買廻し下直なる家又ハ稀なる諸職其家々行て（後略）

農人橋西詰	北久宝寺一丁目筋	御堂筋順慶町南へ入
心斎橋筋過書町角	立売堀一丁目北側	瓦町西横堀東
唐物町二丁目	大川町井池筋浜	長堀橋北詰西へ入
中橋南久太郎町東側石橋北一軒目		南久太郎町三休橋東へ入
農人橋5半丁西	新町東江角	上町石町
日本橋北へ三丁目油町		大坂御霊前
土佐堀白子町	難波てつがん門前	摂州今宮廣田鳥井（居）前
ごりやう前	「遊郭」	心斎橋筋大（大に丸印あり）北の丁

商人買物独案内から任意に拾い出した町名を眺めると人々がどのようにして目的地に到

24) 土橋可教『商人買物独案内』、文政7年

着したかよくわかる。

「農人橋西詰」は町名を語らず「橋」を基点にしている。「北久宝寺一丁目筋」は通りとして「線」を基点にしている。「御堂筋順慶町南へ入」は古典的方法で京都の呼び方をそのまま踏襲している。「線」と「線」の交差点から次ぎの目標として「方角」を指示する。「心斎橋筋過書町角」は「線」と「角」を基点にしながら、「角」の「絶対的位置」を示す。「立売堀一丁目北側」は立売堀北側一丁目が正しい町名だが、意味としては立売堀北側一丁目の北側に位置するぐらいの事で立売堀と方角の北を中心に据えている。

「瓦町西横堀東」は「線」と「線」の交差点に「方角」を加味している。「唐物町二丁目」についても多くの例があり町名の場所に自信があるのだろう。（『懷中難波すずめ』²⁵⁾では唐物町の商売として、はな紙袋・革細工・なめし皮屋・扇ほねや等があり、商人買物独案内では「革類小間物所」たび・たばこ入・太鼓唐物、「革たばこ入錢入類」馬道具・皮花緒とあるから革・小間物等で名が知れ渡っていたと推測する。）「大川町井池筋浜」も「線」と「線」の交差点を基軸にしながらも「浜」を方角として暗示している。「長堀橋北詰西へ入」は「橋」を基点に方角を示す。「中橋南久太郎町東側石橋北一軒目」は「線」と「線」の交差点から背割の雨水に架かった石橋から北一軒目にあるが、表側に位置しないから「状況」を補足している。「南久太郎町三休橋東へ入」は「線」と「線」に「方角」を示す。「農人橋^あ半丁西」は「橋」と「方角」。「新町東江角」は「遊郭」「方角」「名所」。上町石町は「八軒屋」「東町奉行所」。「日本橋北へ三丁目油町」は「橋」と「方角」。大阪御霊前は「神社」。土佐堀白子町は「橋」と「松江蔵屋敷」。難波てつがん門前は「寺」。摂州今宮廣田鳥井（居）前は「神社」。ごりやう前は「神社」。心斎橋筋大（大に丸印あり）北の丁の大的意味は「大丸」。

「東町奉行所」「遊郭」「神社」「松江蔵屋敷」「寺」「大丸」は名所・有名店を基点に取り込んでいた。

8. 地図の版元と再版

地図の版元と発行年号はどのようなになっているのか「享保以後大阪出版書籍目録」から抽出してみた²⁶⁾。

- | | |
|-------------|--|
| 1、大坂全図 | 一折 板元 富士屋長兵衛（高麗橋一丁目）
出願 文久四年二月 |
| 2、両面大坂絵図 | 一枚摺 作者 富士屋長兵衛（高麗橋一丁目） 板元 右同人
出願 明和九年五月 許可 明和九年六月二日 |
| 3、補改正摂州大坂畫図 | 一枚 作者 柳原源治郎（京町堀一丁目） 板元 富士屋長兵衛（高麗橋一丁目）
出願 明和九年六月 許可 明和九年八月二十一日 |

25) 復刻『懷中難波すずめ』、清文堂出版、昭和44年

26) 『享保以後大坂出版書籍目録』

- 4、再板摂州大坂地図 折本一枚摺 校正者 曾谷忠助（高麗橋一丁目） 板元 播磨屋九兵衛（高麗橋一丁目） 出願 天明九年二月
- 5、再板大坂畫図 一枚摺 校正者 曾谷忠助 板元 播磨屋九兵衛 出願 天明九年二月
- 6、再板両面大坂図 一枚摺両面 校正者 曾谷忠助 板元 播磨屋九兵衛 出願 天明九年二月
- 7、大坂指掌之図 両面一枚摺 作者 曾谷忠助（平野町二丁目） 板元 播磨屋九兵衛（高麗橋一丁目） 出願 寛政五年八月 許可 寛政五年八月二十六日
- 8、三郷分色大坂細覧図 書翰摺 作者 赤善應（高麗橋一丁目） 播磨屋九兵衛（高麗橋一丁目） 出願 寛政九年六月 許可 寛政九年十二月五日
- 9、文政新改摂州大坂全図 一冊一枚物 校正者 赤松善應（故人） 御絵図師 閤者 大岡藤二（徳井町） 板元 播磨屋九兵衛（高麗橋一丁目） 出願 文政三年十二月 許可 文政四年五月十三日
- 10、文政新改摂州大坂全図（安治川口新地増補） 折本一枚摺 増補発行願出 補正者 御絵図師 大岡藤二（徳井町） 板元 播磨屋九兵衛（高麗橋一丁目） 出願 天保三年四月〔附記〕本書板行の出願は聞届けられず
- 11、改正摂州大坂図 折本一冊 安治川口新田廻船目印山増補 板元 播磨屋九兵衛（高麗橋一丁目） 出願 天保四年九月
- 12、改正摂州大坂図 再刻発行申出 板元 播磨屋九兵衛 右板元よりの申出を本屋行司 慎組にて聞届け板行 申出年月 天保六年三月二十日
- 13、天保新改大坂之図 一枚摺 開板発行申出 板元 播磨屋九兵衛 右板元よりの申出を本屋行司にて聞届け板行 申出年月 天保七年五月十一日
- 14、天保新板大坂之図 一枚摺 原板消失に付再刻発行申出 板元 播磨屋九兵衛 右板元よりの申出でを本屋行司 篤組にて聞届け板行 申出年月 天保八年三月
- 15、大坂全図 再板発行申出 板元 播磨屋九兵衛 右板元よりの申出でを本屋行司 篤組にて聞届け板行 申出年月 天保八年九月
- 16、大坂中図 一枚摺 再板発行申出 板元 播磨屋九兵衛 右板元よりの申出でを本屋行司 篤組にて聞届け板行 申出年月 天保八年十月
- 17、大坂指掌図 一枚摺 再板発行申出 板元 播磨屋九兵衛 右板元よりの申出でを本屋行司 篤組にて聞届け板行 申出年月 天保八年十月
- 18、改正攝津大坂之図 折本一冊 旧板に「目印山」を増補発行申出 板元 はりまや九兵衛 右板元よりの申出でを本屋行司 慎組にて聞届け板行 申出年月 天保九年六月五日
- 19、大坂指掌図 此度「目標山」を増補発行の旨申出 板元 播磨屋九兵衛 右板元よりの申出でを本屋行司 慎組にて聞届け板行

- 20、摂津国大絵図 申出年月 天保九年六月二十日
 一帖 此度「猫間川」並に「天満新堀川」増補発行申出 板元
 河内屋善兵衛 右板元よりの申出でを本屋行司篤組にて聞届け板
 行 申出年月 天保十一年四月二十日
- 21、 大坂地図（天保十五年に板行許可）
 大坂細見之図（弘化二年に板行許可）
 大坂全図（弘化四年に板行許可）
 大坂中絵図（弘化四年に板行許可）
 大坂指掌図淀川之図入（弘化四年に板行許可）以上五種
 板元 今木屋市太郎 代判 藤兵衛

以上五種の書は先年大阪の書肆播磨屋九兵衛方にて板行せしも当時諸仲間御差止の御趣意中なりき其後右板木を今木屋市太郎方に買取りたるが此度仲間再興に付先規の通り記帳ありたしとの申出でにより其旨聞届け置く

申出年月 嘉永五年五月二十三日

大阪図の発行部数は350部から300部、多くて1000部ぐらいであることはすでに述べた。この部数では、所謂、庶民に地図等を購入することは難しい。

大阪図の板行の多くは播磨屋九兵衛が板元となっている。先に抽出した20の地図中11図を再板している。再板したからといって庶民が地図を購入したわけではない。既に地図を持ち合わせている人が新しい地図の購入、更に同業者や地図の効用を聞いた人がこれを求める。新名所を新しく彫って再板するのも、新たな地図購入者を増やしている。

庶民にとって高価な地図よりも安価な絵図の方がわかりやすかった。そして決定的であったのは従前の地図に魅力がなかったのは観光名所が記されておらず、その点絵図は遊びに関係する事柄が満載されていた。このことは庶民が地図を買わない理由の一つでもあった。